キャプション評価法による高齢者の海岸断面型選好性調査

東海大学　学生会員　○菊地拓実
東海大学　正会員　仁木将人
東海大学　学生会員　石原　尚

１．はじめに

高齢化社会において，インフラ整備は従来の健常者が利用しやすい整備から高齢者・障害者に配慮した整備へと変化している．河川や海岸でも高齢者に配慮した施設が作られるようになったが，整備の進んでいない水辺も多く残されている．東海大学海洋学部が位置する静岡市三保地区は，羽衣の松で有名な三保の松原や海水浴場（真崎海岸）を抱えるものの，付近の高齢者を対象とした水辺に対する意識調査では，海辺へ行きたいと思っているが，利用できない人が多く見られた．その理由として，半数以上の高齢者が一人で行くのが困難であると答え，また，怖いと言う理由も多く見られた（図 1 参照）．

そこで本研究では，老人が安全で利用したいと思える海岸像を提示すべく，景観調査法を活用した施設調査を実施し，調査法の有効性の検討とともに高齢者の好む海岸施設の意識調査を行った．

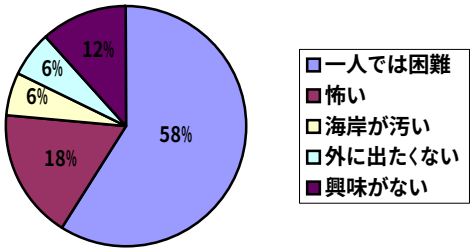

図 1　高齢者が海岸を利用しない理由

２．調査方法の概要

調査は，三保地区にある高齢者施設利用者を対象に自由記述形式のキャプション評価法により実施した．キャプション評価法とは，古賀ら（1999）によって景観に関する市民活動のために作成された参加型調査手法であり，「写真投影法」および「評価グリッド法」を参考に開発されている（小島，2000）．「写真投影法」とは，精神医学分野において，被験者が撮影した写真の読解から精神分析を行う手法である．また「評価グリッド法」は臨床心理学の分野で治療を目的に開発された面接手法をベースに改良発展させたインタビュー調査手法である．アンケート調査で一般的に用いられる SD 法では，調査者により評価項目が決定されるが，キャプション評価法では参加者の生の声を聴くことができるため調査者の主観が排除され，斬新な少数意見が得られる利点がある．ただし，本来のキャプション評価法は，評価者が実際に現地に行き「いい景観」もしくは「いやな景観」と思った景観を撮影し，その景観の「何の(要素)」「どんなところ(特徴)」が「どう感じられる(印象)」のか，の 3 点を自由記述形式で明記する．しかし，今回のアンケートは高齢者施設の老人達を対象にアンケートを行う為，歩行が困難な人も多く，評価者が現地におもむき写真を取る行為が困難と思われた．そこで今回は海岸の断面型に関する選好性に絞り，代表的な断面型を CG により作成した海岸景観にフォトモンタージュすることで断面型のみが異なる疑似海岸を作成しこれを評価してもらうこととした．抽出した断面型は，直立護岸，張出部付き直立護岸，ビーチ，緩傾斜護岸および階段護岸の 5 つである．作成したアンケート用紙の一例を図 2 に示す．アンケート用紙には疑似海岸の写真の他に簡単な断面型の説明，「良い」「悪い」の判断と自由記入形式のコメント欄のみとし，評価者の自由な意見が書き記せるよう注意した．

図 2　アンケート用紙

3．アンケート結果とその考察

2つの高齢者施設から31部のアンケート結果を回収した．回収されたアンケートを合議制のKJ法的分類により，特徴，印象，判断の3要因に分類し整理を行った．整理結果により得られたチャート例を図3に示す．チャートを活用することにより海岸断面型毎の特徴やそれに対する判断，問題点を導出することが可能である．例えば，張出部付き直立護岸のチャートでは，特徴としてテラス，柵，木造が挙げられ，テラスに対しては良い印象が多かったが，柵に対しては親水性，安全性の面で良いと悪いに印象が別れている．特徴の一つとしてあがった木造に関しては，モンタージュした写真の影響であり，写真の選定に対しては十分注意が必要である．

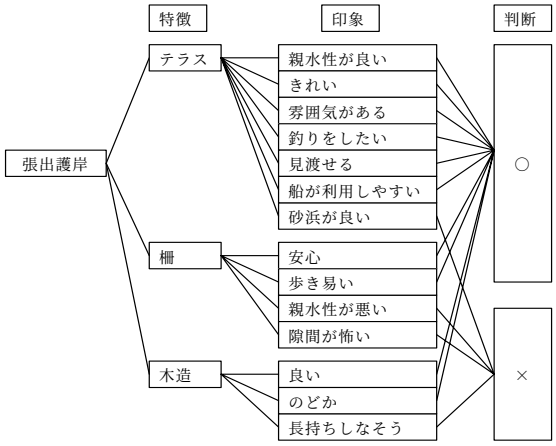

図3　張出部付き直立護岸チャート図

図4はKJ法により分類した結果を，景観，利用に対して複数名によって点数化し整理したものである．縦軸は利用のしやすさを示す利用評価，横軸は景観の良さを示す景観評価となっている．散布図のバブルの大きさは「良い」「悪い」の判断で「良い」が多いほど大きくなっている．

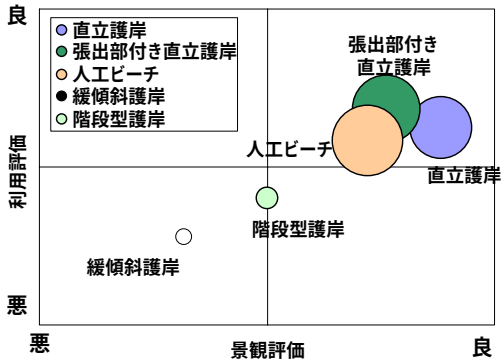

図4　海岸断面型の評価結果

図4のように，キャプション評価法を利用した調査においても，コメントを丁寧に解析することにより，評価者の感性を視覚的に整理することが可能であることが分かる．また，あらかじめ点数化された評価項目を統合するのではなく，コメント欄の言葉の点数化を可能とすることで，少数派の斬新な意見も点数化することができる．

図4から5つの海岸断面型を評価すれば，評価の良い3断面と比較的評価の悪い2断面に分かれる．直立護岸，張出部付き直立護岸，ビーチは評価が良く，「良い」か「悪い」の判断でも過半数の人が「良い」を選択した．総合的に評価が高かったのは張出部付き直立護岸であり，景観，利用の両面でバランスの良い評価が得られた．直立護岸は景観面に対する評価が高く，きれい，行ってみたいといった評価が寄せられたが，利用面にたいする評価コメントが少なかったため点数が低くなっている．同様に「良い」の判断が多かったビーチだが，コメント欄からの点数化では直立護岸と張出部付き直立護岸の評価を下回った．景観面に関しては良好なコメントも見られ，昔を思い出して良いなどの郷愁にかられた意見も寄せられたが，利用面に関しては否定的なコメントも多く，歩きにくいなどの意見が見られた．階段型護岸は「良い」「悪い」の判断が同程度であり，コメント欄の点数化でも利用面で否定的な意見が多く，特に安全面を不安視するコメントが寄せられた．緩傾斜護岸は「悪い」の判断が「良い」を上回り，コメント欄の点数化でも唯一景観，利用の両面で否定的な評価となった．

4．おわりに

景観調査手法であるキャプション評価法を利用した海岸施設調査を行ったが，KJ法的分類および多変量解析を利用することで「特徴」や「印象」の把握が可能であり，総合的な施設評価が行えることが分かった．また，今回の被験者は高齢者ということもあり，個別尺度によるアンケートは負担がかからず，こちらの意図も伝わりやすかった為，答え易く，好評であった．

謝辞

意識調査には「松風荘」「庵原屋日和館」に協力仰いだ．この場を借りて謝意を表する．

参考文献　環境心理調査手法入門(2000)：日本建築学会，技法堂出版，p.136.

古賀ら(1999)：キャプション評価法による市民参加型景観調査，日本建築学会計画系論文集，第517号，p.79-84.